

(一統)

第 二 百 四 十 四 號  
明 治 三 十 二 年 二 月 二 十 四 日 第 三 種 郵 便 物 可  
大 正 四 年 二 月 十 五 日 發 行 ( 每 月 十 五 日 發 行 )

天晴會發行 大正三年度

# 天晴會講演演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢  
本文約八百頁  
總クローニス製美本日蓮上人御尊像及講演會寫真入り  
送(内)地拾八錢  
料(朝鮮滿洲臺灣)四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凛乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし  
直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

▲思想會の羅針教書 二十日發行 一刻も早く之を讀んで自己の思想生活の充實を期せよ

發賣元 東京市神田區美土代町二、一  
發賣所 東京市小石川區白山前町十七  
三上 秀舍  
義徹  
電話本局二〇七九番三三八四番  
振替口座二五七四七番  
振替口座東京二八八四〇番

## 青島視察談

大正四年三月十五日發行(毎月一週十五日發行)

### 信仰と寺院

海軍少將 佐藤鐵太郎  
東京美術學校教授 竹内 久一

### 不朽の名譽を發揮せよ

小原陸軍少將を訪ふ 記者

### 吾が信仰の經歷

鹽谷 時重  
三上 義徹

# 統一

叢 月 號

第 二 百 四 十 一 號

## 佛教の統一觀

大僧正 本多 日生

愛國生命保險會社 監事 鹽谷 時重



マスター、ナゲ、アツツ 柴田一能君著

### 立正安國論略解

現代百科文庫 宗教叢書 (三十部以上は一部) (金九銭の割とす) (一部郵税共金十二銭) (種珍美本百十頁)

自然主義に満足せざる現代人は靈の宗教を求む宗教の中にも聖日蓮の論道せられたる大主義に來らんとする氣運已に熟せり此時に當り本書著はる本書は通俗的に立正安國主義を明かにし聖日蓮の卓越の識見を説く

鎌倉時代の概観。聖日蓮の背景。當代佛教の内状。聖日蓮の感奮。岩本實相寺の入藏。立正安國論とは何ぞや。立正安國論の題意。立正安國論の結構。本論の文學。遺文に於ける本論の位置。本論の異本。本論の進達

▲日蓮主義研究家の一讀すべき良書なるは勿論進呈用として尤も佳也

東京小石川白山前町十七

發賣所 三上義徹

(振替東京二八八四〇番)

### 妙法華經並開始

第壹種 紙裝 定價金貳拾 郵税金四拾五 第貳種 布裝 天金 郵税金六 郵税金六

▲文明人は最高の思想に接觸するにあり、法華經は最高文明の中樞也、日本人は文明人も、故に本書を備へ之を精讀すべき也、菊判半裁判にして携帶に便也

小原陸軍少將講

### ▲軍神加藤清正公

▲在郷軍人への施本には尤も適

當なり百部以上は特に大割引をなすべし

一部は金貳錢 稅貳錢也

### ▲法華經講義

洋裝全二冊二千餘頁 定價金參圓郵税金拾六錢

本書は本多大僧正が心血を瀝いて著されたるもの、日蓮主義を研究せんとするものは必ず本書を一讀して甚深の妙義を味ふべし、未だ本書を讀まざるものは速かに座右に供せよ

### ▲橘香集並製

金拾錢

### ▲勤行作法

稅一部五錢

# 不朽の名譽を發揮せよ

現代に於ける器械文明の壓迫は、吾等の生活上に著しき矛盾と撞着を來たし、ために人生の不如意なるを歎いて消極悲觀に陥るものあり、或はかゝる矛盾を顧みず自然衝動其まゝの生活に憧られ、盲目的に生存欲を充たさんとするものあり、されば自己の生と其死を思はず、我が生活は全く器械のばねが止まる様に考へ、人生には理論的及宗教的意義の存する所以を省察せざる行き當りばつたり主義のものが甚だ多い、けれどもそれ等は未だ如實に人生を徹底したるものではない、人が其生活を營むに於ては先づ第一に我が進む行くべき不變の方向を定め、其第一義諦に向つて勇往邁進して行かなければならぬ、およそ人生に何等の理想及目的なくして生存をなし得ると云ふ事はあるべき事でない、既に理想あり、そこに必ず天職の自覺がなければならぬ、其自覺の力が有ゆる器械文明の壓迫に反抗して、現在の矛盾より來る悲痛缺乏を開顯し、全身心の力を捧げて前途の開拓を進めて行くことが眞理である、我が現在の生活のそれが一時的でなくして將來に大なる關係を持つて居るものであるから、力の弱い意氣地ない



生活を營んで居るならば、それは即ち自己を泯亡する所以である。假し如何に意義なき今の生活が百歳まで續いた處が、吾が生自覺がなければ自己の發展もない、のみならず第三者に對して何等の貢獻をなす事が出来ない、左様な生存は犬死である、犬死をする位人生の恥辱はあるまい、我々が生活を營んで居るのは、先天的職分を遂行する爲であるから、自他共済の菩薩的態度がなければならぬ、百年の健康壽命を保つても精神生活に進み來らぬならば、夫れは人としては生甲斐のないものである、僅かに一日であらうとも人間たるの自覺を以て人類社會の爲に全身心の努力を注ぐならば、物質生活の方面に於て矛盾撞着があつても、それは精神的事業に偉大なる成功を遂げたるものであると言はねばならぬ、日蓮上人が

「百二十まで生きて名を下し死せんよりは、生きて一日たりとも、名を擧げんこそ大切なり」

とは、無限の精神生活に包まれたる現在の努力的生活を教訓せられたる格言である、こゝに朽ちざる名譽の發揮あり、かくて吾等の名譽的生活が無限の力に靈化せられなば其内容及形式に大なる變化を起し、さうしてこの現在の生活に峻烈なる元氣と健實なる確信を與へて猛烈なる突進を促すのである、この思想の力に依つて行動するの時、一

切の感覺的迷盲の見解は除かれて、崇高なる宗教的熱情が湧いて來る、どうしても起らずには居られない、日蓮上人の法華色讀の壯觀は即ちそれである、上人が佐渡塚原の雪中に

「心は法華經に奉り名をば後代に止むべし」

と、其生涯の一切を法華經に捧げ、其運動は『不自惜身命』『我不愛身命』の態度である、あゝ實に宏遠壯大なる生活ではないか、大上人の絶叫せられたる思想及び身讀の宏範は、人生生活の第一義を徹底的に解決せられたるもの、各人個々の病的機根に應ずるが爲でない、世の人は宗教の目的は應病與藥主義であると云つて居る様ではあるが、それは未だ宗教根本の理義を辨へざるもの、管見に過ぎない、宗教と云へば基督教が其代表であると思ひ、佛教と云へば三部經大日經であると考へて居る様な幼稚なる識見を以て、何條宗教の本義が理解されようぞ、勉して云はゞ斯かる智能を以て宗教の商量を試みんとするは甚だ僧上の沙汰である、彼の三部經や聖書や大日經は、或一部の人心に一時的慰安を與へる事が出来ないではないが、而しながら人類全體の精神的欲求を満足せしめ、さうしてそれを無限の生活に進めて行くと云ふ事は斷じて不可能である、若しそれ等の思想に化せられなば享くる所の弊毒頗る大にして、たゞに其人を賊するの



みならず、健全なる精神の發展を妨ぐることになる。日蓮上人が鎌倉當年に於て宗教思想の革正を唱へたのは、單に佛教内部の偏見固執を正したと云ふばかりでなく、思想文明に於ける中心を明かにして精神生活の方向を示さんが爲めである。觀よ上人の遺文全體は皆最高の思想問題を論道して居るではないか。彼の念佛や眞言や禪宗などを當の敵として居る様であるけれども、それは誤れる彼等の思想傾向を叱責して健實にして中正を得たる法華經思想に歸一せしめんが爲の高唱である。抑も釋迦牟尼が法を説き教を垂れ給ふ所以は、吾等をして久遠の生活に入りて菩薩的の運動に努力せしめ、徹底せる自覺的自由生活を得せしめんとするに在り、故に日蓮上人が日本國民の全體は現在生活の誤れるを自覺して意氣ある國民的宗教的生活に進み來たれよと熱叫せられた所以である、さうして其全生活の標準は法華經に憑るべきを教へ、自ら進んで矛盾撞着的劇しき實生活の中に、限りなき喜びと大なる満足をも以て法難を物ともせず法華色讀の壯烈史を貼したのである、上人曰く

「日蓮が流罪は今生の小苦なれば歎かはしからず未來に大樂を得べければ大いに悦ばし大いに悦ばし」

と、如何に崇高莊嚴なる生活ではないか、信仰的生活の前には壓迫や矛盾や撞着や何かある。信仰は現代の半可通が考へて居る様な根底のない迷盲の禮拜ではない、禮拜の行爲によりて現實に報酬を得んとする形式でない、無限向上の進行生活である、されば日蓮主義の信仰の内容には、立志あり誠實あり節義あり、獨立あり果斷あり耐忍あり、克己あり内省あり奮進あり努力がある、信仰は單なる口唱でない。身口意三業の一を缺くことを容さぬ、勇猛なる決死の覺悟を以て聲の續かん限り、思想上の戦線に南無妙法蓮華經と唱へて進軍の喇叭を吹奏し、身自から敵陣に突撃して劣悪思想の軍勢と奮戦せねばならぬ、日蓮上人は戰を宣して

「權實二教の戰を起し忍辱の鎧を着て妙教の劍を提げ、乃至、敵は多勢なり法王の家人は無勢なり今に至つて戦止む事なし」

と、一閻浮提における敵勢その力盡きて降伏するまでは戦はねばならぬ、斯く戦つて殪れてこそ徹底せる名譽の發揮である、

幸なる哉、日蓮大上人の意氣精神、今現に潑瀾として爰に存す、既に力の失せたる老耆者は厥起の勇なからんも、苟くも青春の血を大偉人の意氣に鼓舞せられんとする者は、元氣よく正直に日蓮大上人の信仰に進み來れよ、而して日蓮主義の戦士なりとの名乗りを擧げよ、活きよ信仰に、斯くて實人生に戦ひよ、



# 佛教の統一觀

本 多 日 生

抑も此の宗教と云ふものが人生、社會或は國家の上に必要なくべからざるものであると云ふことは、素より誰しも異論のないことであらうと思ひますが、併し乍ら我が國に於ては未だ宗教の眞正なる使命を自覺して居る人が極めて少い、宗教の弊害の側から眺むる人は大變多いけれども、弊害を除却した宗教の健全なる意味の使命と云ふものが人生社會國家の上に如何なる必要を持つものであるかと云ふことを、極く冷静に研究し思ひを潜める人が誠に乏しいのである、是は即ち國家の憂いである、そこで健全なる宗教を以て國家の興隆に資し、人生に發揮すると云ふ場合には如何なる方法に出づるかと思ふことを考へるに、或は新しき宗教を創立するが宜いと云ふ議論もありますけれど

も、是は言ふべくして行はれないことであらうと思ふのであります、それは現今の新しい理想家が考へて居る位のことには、既に過去の歴史的宗教の中に説破されてあるのみならず、それが歴史的的色彩を帯びて所謂宗教の尊嚴權威と云ふものを加味して來て居るのであるから、今の理想家の案出せるものが假令議論として多少完備した意義を加へて居つても、到底新しき宗教を以て歴史的宗教に代ゆる程のものが出来ないのは勿論斯様なものが社會に行はれるとは信ぜられないのである、然らば過去の歴史的宗教に於て、其の短所弊害を芟除し健全なるものにすると思ふ場合に、如何なる宗教を以て之を爲すか、或人は基督教を見てさうして或部分に改良を加へたら宜からうと考へるてありませう

が、我々はそれには大反對である、何故ならば、我々の見地に於ては基督教の健全なる部分と云ふものが皆不健全なものであるのである、基督教の短所弊害は無論可けないが、其の弊害を除き去つて健全なりと稱する所のものも良くない、基督教は總て根本より不健全なものであると思はれないのであります、其の理由は申上げませんが、我々の眼より見れば、さう云ふ結論に正に到達するのであります、どうしても我國に於て我が日本の社會人生國家を全うする上に於ては既成宗教中にては佛教を復活せしむるより外に途がないと思ふのであります、然らば其の佛教を復活するには何より始めたら宜いかと考へると、それは佛教なるものの解釋を健全にして行くことより始むべきである、佛教の習慣とか或は僧侶寺院、其他信仰状態に於て種々の弊害があるけれども、それは矢張り根本へ戻つて考へて見れば、其の宗教の解釋に於て既に誤つて居る所があるのである、どうも私の多年の研究の結果から考へて見ると云ふと、例へば人格が腐敗するとか僧侶

が墮落すると云ふやうなことも、之を教育し之に與ふる佛教の解釋、教義の説明がどうもグラ付いて居るが爲に、之を奉ずる者の人格も隨つて教へと一致しないものであらうと考へる、故に根本の問題は教義に存することと思ふ、教義其のものに誠に説明を與へると云ふことが、どうしても宗教を改善し健全なる宗教を押し立てる基礎を爲すものであらうと思ひます、而して其の解釋であります、解釋に就ても矢張り佛教は随分廣いものでありますから、いろ／＼なことがある、其の種々なものを合せて居るのを唯漠然と佛教と稱して行くと思ふやうに、是迄各宗派に別れ、夫れ／＼個々別々の主張の存して居る佛教を其儘承継すると云ふやうな混同的に見て行く思想であつたならば、到底佛教は復活することは出来まいと思ふのであります、然らば其の佛教の良い所だけを捕らうと云ふことになつたとしても、何等の標準もなく根據もなく、唯思ひ付いた儘此處が良い彼處が悪いと云ふやうな粗雑な頭腦を以て佛教の長所を探らうとしたならば、到底満足な結



論に達することは不可能であり、長所を綜合すると云ふ考へは洵に宜いけれども、其の綜合と云ふ事は矢張り大なる深玄なる標準に基かなければ出来ないのであります、故に佛教の解釋は、先づ第一に一つの大きな標準根據を作つてそこから統一的に佛教を解釋すると云ふ方式を採用するより外にないと考へるのであります、今さう云ふ理想を以て統一的に佛教の解釋を試みやうと考へて居る所のものがどこに在るか云ふと、是はどうしても我が日蓮主義を除いて他には斷じてないのである、多少は眞言などに於ても佛教の全體を統一的に見やうと云ふ考へはないけれども、淨土宗は極く牽強附會の説を立て、居るのである、淨土宗眞宗何れも佛教を統一すると云ふ理想抱負は何もない其の説く所は我々は愚なものだから此の人生では確なことが出来ない、能く信心をして淨土へ行つてかく安樂を得よと云ふ所の消極的な退嬰主義の思想である、彼等は言譯をいろ／＼するけれども、それは強辯であつて本當の着想は斯の如きものである、次に禪宗の如

きは是は高い教であるけれども、矢張り向上の一路と云ふやうなと言ふ所は大變氣の利いた風であるが、唯己のみ獨り高く止まつて世を顧みず、人を厭い竹林の七賢人見たいな變哲を生ずるのである、兎もすれば世の中の人間との交渉を絶たんとする、故に從來禪宗にては公衆に對して布教をやらぬ、寺の門を堅く閉ぢて人を入れさせない、求道者が門を開けて教を乞うて来る、それでも尙説法しては可かぬと云ふ位になつて居るのであるから、今日に至る迄禪宗には説教する所の方式はなかつた。縱令従前多少説法したことがあつたとて、それは全く宜い加減な佛教の寄せ集めを誤魔化して説いて居たと云ふだけで、佛教の本義などを説法したことはない、悪く言へば虚偽な教を述べて居たと云つて差支へない、故に最初から此の佛教を統一的に解釋しやうと云ふ着想を持たないのであります、古い所では華嚴宗などは威張つて居るけれども、其の教義は天上の高い所に居る唯一分の菩薩に向つて説いたもので、普通の人は之を見ても分らないやうなもの

である、然るに其の普通の人が見て分るまいと云ふことを以て深遠なる教とし之を誇りとしたやうな譯である、されば民間に於ては華嚴經を讀むものなどは絶へてないと云ふ有様であつた、どうも斯う云ふやうなものが大變佛教を誤らしめて居るのである、故に今日に於ては宗教の必要を感じ、殊に健全なる宗教を押し立てが爲に、佛教に對して統一的解釋を爲すことが非常に大切なことであると云ふことが痛切に感ぜらるゝのである、是は唯に佛教を自身爲めにのみ言ふのでない、國家社會人生の爲に佛教の統一主義の解釋を研究しなければならぬと思ふのであります、又之を布教して社會に廣宣流布せしむる上から見ても、どうしても統一的にやらなければならぬと思ふのであります、而して佛教が統一的ならざるが故に、世人は動もすれば之に非難攻撃を加へんとするのであります、先づ佛教に反對する側から言へば、佛教はいろ／＼なことを言つて方便など、稱し、荒誕無稽なことを言ふものであると云ふやうに考へて居る人がある、斯う云ふことを

考へるものは、世に頗る多く、彼の平田篤胤翁の如きも之を唱へ、尙多くの今日の教育者が攻撃するのも其の通りである、さうして之に關聯して様々なることを言つて居る、どこも其の害が多いと云ふやうになつて居る、又第二の議論は、佛教が多くの種類に分裂して居ることを非難して居ります、さうして自分が攻撃するの都合の宜い所を取つて佛教を排斥する、例へば此の佛教は厭世悲觀的なものであるとか、或は今日の道徳を無視したものとか、又其の教義は哲學として價値なきものとか稱する、而して例へば阿含經の中の最も哲學的價値低き箇所を摘出して攻撃する、是は即ち佛教の中心が缺けて居て統一的の解釋を爲さないからである、分裂的の解釋を許して何處を擧げて來られても、何とも反駁が出来ないやうになつて居るからである、又反對者の側から見ても然るばかりでなく、内の信仰から見ても、佛教は何處も此處も同じやうに宜いものの如くに考へて居るからして様々の謬見が起る、淨土宗に於ても間違つた信仰を抱き、禪宗に於ても野



孤禪のやうなものとなつて仕舞ふ、即ち佛教の分裂的解釋の結果が、斯る間違つた信仰を出したのであると思ふ、それであるから反對派を挫くにしても、内部の信仰を革新するにしても、統一的解釋と云ふことを大に發揮すべく努力して行かなければならぬと思ひます。尙今一つ考へなければならぬことは、我が日蓮宗に就ても矢張り同一の必要を痛切に感ずるのである、日蓮主義は折伏主義と云ふことを標榜して居る、是は無論結構なことに相違ない、併し乍ら其の折伏主義に一つの大きな弊害が伴うて居りはせぬであらうか、夫れは統一と云ふ理想を忘れて徒に他を排斥するとか攻撃するとか云ふ一事である、統一の理想の爲に他を排斥するは素より良し、されど此の理想を忘却して唯比較的に法華宗は健全である、日蓮宗は宜いと云ふことを單に他と相對して唯己れの優れて居るのを誇り、他を排斥すると言ふやうな小さな孤立的な考から折伏を使つて居るのが世の法華宗信者の九分九厘迄である、折伏主義と云ふものはさう云ふことに用ゐられて居るけれ

ども、日蓮上人の御許しになつたのは、統一の理想を實現するには折伏なかるべからず、他の誤りを匡正しなければ此の大なる理想を知らしむることが出来ないからして、安逸を貪れる心を戒しむる爲に折伏を用ゐるのは至極宜い、併し唯己れの日蓮主義は大なる權威がある、特色を有して居ると云ふことを威張り散らす爲に用ゐる折伏であつたならば、それは非常な弊害があつて儘に佛教徒の内に波瀾を生ぜしむる、己れのみが高いと誇るだけでは決して佛陀の本旨を發揮することが出来ないのは勿論、遂に魔の中に墜ち込んで仕舞はなければならぬことになる、私はどうしても此の日蓮主義は折伏を行ふ爲めに於て、一層統一の理想を振興し其の精神を發揮して行かなければ、折伏と云ふものは有害であると思ふのであります、是は實に日蓮主義者の反省すべき點であると思ひます、恰度例に當るかどうか知れませぬが思い付いたから申し上げますが日本に於ては國家主義と云ふことを教育の根本方針として確立して居りますが、日本の國を維持し、益進歩

發展せしむる上に於て、是は無論結構なことである、併し乍ら若し人道を忘れ仁義を顧みず、唯國家の利權を獲得すればそれでよしと云ふやうに、恰も獨逸の帝國主義のやうな具合に實に無殘なことをやつても、又卑劣な小人的な事をやつても唯日本の利益にさへなれば差支ないと云ふ風に、極く我利我利の國家主義を以て教養して來たならば、國家主義と云ふものは非常に誤つたものであると言はなければならぬ、それであるから今日斯の如き國家主義は幾分弊害があるからして、國家主義と人道主義との調和を圖りて之を理想的國家主義と爲し、日本人は此國家主義の發揮に努力し大なる稜威の光を輝やさなければならぬ、さうして國威を八紘に輝かし世界的文明を建設しなければならぬ、斯の如き國家主義を發揚せしむべき教育道德の問題が、日本の國民思想の問題に於ては一番緊要な問題になつて居ると思ふのであります、二三の有益な思想上の問題を議する會合へ出席して見ますと、日本の國民思想の問題、國家主義と人道主義、極く健全な意

味に於ての理想的な國家主義を發揮せしむることなどが最も重きを置いて論ぜられて居て、人道主義と調和せざる國家主義は必ずや日本を禍するであらうと言はれて居る、それと同じく折伏を標榜する日蓮主義は宜い、けれども此の法華宗の權威を發揚し理想を發揮すると同時に、あらゆる他の思想も適當に攝收し調節して行く所の思想がなかつたならば、即ち唯宜くも悪くも徒に他を排斥すると云ふ考ばかりであつたならば、所謂之は陝隘固陋な帝國主義と同じであつて、法華宗は妄りに他の排斥をやるのみであつて、決して理想を發揮することが出来ない、日蓮主義の折伏を發揮するには、必ず統一的理想を明かにして行かなければいけませんと思ふのであります、それから尙統一と云ふことに就て一言したいと思ひます、日蓮宗は統一主義と云ふことを眼目にして居るからにも依りませうが、統一と云ふことを解釋して、統一とは自分の議論が良からそれを持つて他の説を悉く自在に説き伏せる、他の説く所は正しきにもせよ正しからざるにもせよ、



何でも彼でも己の論を主張してそれを倒すと云ふことが統一であるかの如く思惟して居る人がある、是は法華經開顯の理想を通して見たる統一と言ふ理想と全然反對である、さう云ふ意味の統一を統一と言はれるかどうか知れぬが、さう云ふ風に一乘にしやうと云ふのは華嚴經の一乘である、華嚴經の一乘と云ふのは、昔の言葉で言へば、未合の一乘と別合の一乘と稱するところがある、他のものはいけないうして排斥し、一つの良いものだけ取るのが未合の一乘と云ふ、未統一と云ふても宜い、即ち統合せられざるものである、最も一つの立派なものがあるのは取るが、外のものは皆いけないと云ふて排斥して仕舞ふのである、是に對して法華經は開合の一乘と云ふて居る、又開顯の一乘とも稱して居る、それから同教の一乘と云ふことを言ふが、同教とは總てを融合同歸せしむること、同一の中心に向つて總てを向はしむると云ふことであつて、是れ誠に法華經の理想であるのであります、法華經の劈頭第一に方便品がある、方便品は様々に分れて居る思想を大なる一つの理想に結び付けて統合しやうと云ふことが主意になつて居る、それから天臺以前は一音教と云ふものがあつた、其の説く所は、抑も釋尊が佛法を説かれたのは、悉く眞實を以て説き示されたものである、然るに其の聽手の方が大きく考へたり、小さく取つたりいろ／＼に解釋を下して阿含經とか華嚴經とか様々なものが出来るやうになつた、併し釋尊の教其のものは徹頭徹尾完全である、何等の方便も何等の差異もない、悉く完全無缺なものであると云ひ思想を言い現はしたものであつたが、それでも多少の理屈もある根據もあるものであるから、遂に一派を爲し相當の勢力を持つて居たのである、而して法華經は全佛敎を調和して其の眞意義を發揮すべく起つたもので、一切經の中心眞髓であるのであります、此の法華經を基礎として最初に立てられた宗旨は天臺である、さうして天臺は法華經の教義に依つて四一開會の法門を説いて居るのであるが、如來が若し最初から眞實を説き正義を表はすと云ふならば、それは不具な如來である、そんな佛

は間違つた佛である、何故かと云へば、如來と云ふものは權實の二智を有してこそ、初めて完全な如來である、權實二智とは應用の智慧であります、權とは假のことである、實は即ち眞實眞理であります、法華經方便品には斯うある、

「如來方便知見波羅蜜皆已具足」

之を天臺は擧げて居る、而して如來一代を見るならば、華嚴を説き阿含を説き、方等般若法華涅槃と種々説かれて居るが、阿含と云ふものは是れ即ち佛敎の未だ眞實なるものでないことは明かである、華嚴も眞實でない、般若も眞實ではない、斯の如く五十年に亘つて如來の説法せられたことは權實の應用を一代の間やつて居られる、時に依り處に従ひ、方便力を以て傳道せられて居る、されば此の中には權敎ある實敎あり、如來は權實共に設けられて居るから之を區別して解釋しなければならぬことは勿論である、而して此の方便品を忘れ法華經が眞實の敎たることを顧みずして、方便に依つて宗旨を立つる所の其の誤解をば攻撃するの

である、併し一切の教義は全部是れ如來が説かれたものであるからして、日蓮宗は適當に之を生かして使ふと云ふことは宜いことである、唯華嚴經に依つて華嚴宗を立て阿彌陀經に依りて眞宗を立てると云ふことは法華宗の上から否定すべきものである、唯無暗に華嚴經を攻撃する必要はない、華嚴經を取つても法華經と宜く調和するのである、阿含經は阿含だけに依つて宗旨を立て、其の阿含が何よりも一番良いものだと思つて、眞實の法華經を打忘れて阿含を一つの宗教として押し切つて行かうとするならば大に攻撃しなければならぬ、併しそれ等の誤解を去つて仕舞つて、釋迦如來の眞意を宜く理解して華嚴經阿含經と云ふものをば、法華經を以て解釋して適當に活用すべきものであります、華嚴宗なるものはいけな、華嚴宗の臭味の存する華嚴經は其儘取つて自由に使はれないけれども、華嚴宗の基礎たる華嚴經としてではなく、如來が親しく説教せられた華嚴經は斯の如きものである、又維摩經は斯の如きものであると云ふやうにして、自在に運用して



行くことは誠に宜いことであると思ひます、日蓮上人御在世當時のやうに、種々の宗旨が勢力を得て居る際に當つて、新たに日蓮宗と云ふ宗旨を樹立せんとする當初に於ては、大に他宗を攻撃して其の勢力を削ぐ必要がある、併し今日は少し時勢が違ひはせぬかと思ひます、華嚴經中の優れて居る箇所、阿含經中の良い點は攝收すべきではないかと思ふ、さうして一切經を自在に統一的に解釋して行くと云ふ方針を立てなければならぬと思ひます、それには種々お話ししたいこともあります、問題が大分大きうございますからほんの一二のとお話することしか出来ませぬ、而して此の大なる佛教統一の目的を達する上に於て、果して如何なる解釋をなすべきやと云ふに、此の權實二智のことに就て、どうしても一度此の法華經の理想に至らしむること、一度は法華經の軍門に下らせて仕舞はなければ、一切經と云ふものは效用を爲さぬものであると私は信ずるのであります、一切經に眞生命を與ふるには之を法華經の軍門に下らせなければならぬ、法華經を

見ない華嚴經、法華經を容れない阿含經と云ふものは即ち何等の用を爲さないものであると云ふことを信じて居る、法華經を通して而して後に華嚴經阿含經と云ふものは、夫々價値を生ずるものであると云ふことが全體の解釋であります、方便品に於て解釋せる三つの方便と云ふものがある、即ち未合方便、方圓方便、能通方便である、方圓方便未合方便はいけない、方便の精神が眞實に合せざるもの、即ち未合の方便は眞實ならざる所の權である、併し能通方便を以て法華經の教に當て欲めて働いて行くならば一切經は復活せらるゝものである、此の思想は日蓮上人は否定したかと云ふに決してさうでない、日蓮上人も矢張り同一のことであらうと思ふ、私は此の點に於ては日蓮上人のお考と少しも違はない積りである、唯宗教の修行の形式、即ち勤行をする時にお經を讀むと云ふ時に、眞宗では阿彌陀經を讀んでお勤めをすと云ふやうなことは否定された、併し解釋上に於ては法華經を以て一切經を解釋すると云ふことは否定されてない、宗教の修行の上

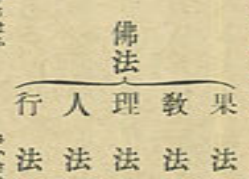
に於て之を許されなかつただけのものである、其の事は何を以て證明するかと言へば、觀心本尊抄に於て極く明かに示されてある。

『法華經一部八卷二十八品、進前四味、退前涅槃經等一代諸經總括之、但一經なり』

華嚴經から阿含經般若經等は皆法華經を中心として生くるのである、一切經は一つのお經である、個々別々のものでない、そして一切經は法華經に依つて初めて復活するのである、此の法華經に從はないうて反對するものは、悉く之を折伏しなければならぬと仰せられてあるのである、是は極めて明白である、此の外に就ては、開目抄にも言ふてある、一代大意抄には「此等の四十二年の説教は皆法華經の誘引の方便なり」と言はれてある、此の最後の一標準を逸したならば、法華經を知らなかつたならば一切經は死物である、方便品に起り壽量品に至る法華經の教義に服従するならば一切經は悉く生きて來るのである、觀心本尊抄の五十三段の終りの方に、

「自過去大通佛法華經乃至現在の華嚴經乃至諸門十四品涅槃經等、一代五十餘年諸經十方三世諸佛、微塵、經々皆壽量品の序分也」

佛教を斯う云ふやうに解釋して行つたならば、直ぐ私の佛教統一のことが出来やうと思ひます、さうして次にどう云ふことが問題となつて來るかと思ふに、佛法を區別すると左の通りになります。



教法とは一切經に教義として含まれて居る、行法は教の實行方法修行と云ふこと、人法とは修行する人間の機根と云ふこと、理法とは教の中に包含されてある所の佛教の眞理或は宇宙の眞理と云ふても宜し、果法とは其の眞理を悟つた佛陀であります、此の五つが佛法であります、此の中に根本のものは何であるかと云



ふに、人法理法果法の三つであり、是が宇宙の説  
 明と人間の説明と一切宗教の根柢を爲すものである、  
 此の五つは永久に變らないものであります、而して之  
 に向つて佛教が統一の解釋を下すことが出来れば佛敎  
 は統一されるのである、教法の上には、種々なる  
 方面を説いて様々に説が分れて居るけれども、それは  
 皆如來が方便の上から説き出した所のものであつて、  
 元々如來の眞實の智慧は分れて居るものではない、眞  
 實の智慧が分裂して居るならば方便の教は用を爲さな  
 い、眞實の方から説いても法華經から離れないやうに  
 一切方便を見さへすれば、そこに直に教法の開顯統一  
 と云ふものが出来て来る、開顯統一された一切經と云  
 ふものは法華經の説いた其の通りであります、それは  
 理屈ばかりでない、此の心を以て阿含經でも華嚴經で  
 も維摩經でも見るならば、明に成程佛敎と云ふものは  
 秩序整然たるものであると云ふことが、どこを指して  
 も解釋することが出来ます、それは事實であります、  
 此の法華經の見識を以て一切經を見るならば實にそれ

が明瞭に認識せらるゝのである、大なる組織的の宗教  
 を爲すのである、之を先づ認識したものは即ち天臺で  
 あつて、日蓮上人に於て大成せられたのである、我々  
 の如き無學の者でも、今日新たに華嚴經を讀み阿含經  
 を取調べると、法華經を初め一切經は釋迦牟尼如來が  
 高調された大理想を適當なる方法を以て發表したもの  
 である、決して矛盾や不統一のない一個の驚くべき大  
 思想の産物であると云ふことが能く理解されるのであ  
 ります、是迄の佛敎も行法の方に於ては、細かい所に  
 行けば或は經を讀むとか、座禪をするとかお題目を  
 唱へるとか、行として見るならば種々行つて居ります  
 が、統一的にそれを見れば行くならば、畢竟するに菩薩  
 の行である、菩薩の行の事業と云ふものは、詰り佛陀  
 の大精神から起るものである、一定した解釋がチャン  
 と立つて見えます、決してさう分裂したものでもなけ  
 れば不統一なものでもない、恰度日本國民は天子様か  
 ら「億兆心を一にして世々其の美を濟せ」と云ふ詔勅を  
 戴いて居る、軍人とか實業家とか學者とか其の從ふ業

務は千差萬別であるけれども、日本國民としての精神  
 は億兆心を一にしたものでなければならぬと同じやう  
 に、釋迦の教も僧侶信者等總てのものが一致して菩薩  
 の行の行法と云ふものが確立されなければならぬ、然  
 るに徒に禪宗の行眞宗の行と分裂して居ては、如來の  
 大精神に戻り菩薩の行を爲すことが出来ない、私は大  
 變面白い言葉だと思つて居ります、護の羅漢滅の羅漢  
 と云ふ言葉がある、滅の羅漢と云ふのは、自分の事の  
 みを爲せば足ると満足して、己れさへ寂滅涅槃に達す  
 れば世の中の他の人の事は構はないと云ふのである、  
 護の羅漢は之に反して自分のことばかりではいけない  
 自分の事は忘れて世の中の人の爲に盡さなければなら  
 ないと云ふ精神である、そうして護の羅漢から菩薩に  
 入るべきものである、羅漢さへさうであるから總ての  
 佛敎信徒は菩薩の行を爲す大精神で以て奮闘しなければ  
 ならぬと思ふ、法華經を讀み南無妙法蓮華經を唱へ  
 ても、菩薩の精神から離れて卑しい小人的考になつ  
 たならば佛弟子とは言はれませぬ、行法統一の根柢

を明かにしなければ、形だけ一天四海皆歸妙法南無妙  
 法蓮華經と唱へても小人的根柢を持ち聲ばかりであつ  
 たならば、決して日蓮上人はお喜びになるまいと思ふ  
 聲だけで宜いと思ふのは大なる間違である、菩薩の精  
 神を以て根柢とする宗教でなければ何の價値もない、  
 菩薩の精神と云ふものは何も六かしい譯のものではな  
 い、誰も之を具備して居るのである、併し日蓮上人も  
 解釋して居らるゝ通りに、一分の菩薩と具足の菩薩と  
 ある、完全な菩薩即ち具足の菩薩になるのは種々六か  
 しい、中々完全な菩薩にはなれないが、理想としては  
 具足の菩薩たらんとして修養すべきである、而して茲  
 に矢張り統一観がある、茲に來れば佛敎が厭世的であ  
 るとか或は消極的であるとか云ふ議論は消えて仕舞つ  
 て、菩薩の行を以て佛敎の實行であるとすれば非常に  
 立派なものである、であるから法華經には如來は唯苦  
 薩を教へて居る、菩薩を作る爲に働いて居る、初より  
 最後迄無量の菩薩を教へて一乘に住せしむる、即ち無  
 量の菩薩を作つて行くと云ふことを説いて居る、從つ



て人法理法果法の三つの意味も能く分るであらうと思ひます、賢いとか愚かだとか智力を標準にすれば種々分裂を生ずる、併し乍ら菩薩の行の考を根本に置けば、萬事は統一的に解決することが出来るものである、而して此の菩薩的の大神を以て進みならば、石を投げられても杖で打たれても何でもない、日蓮は日本國民一般に皆菩薩的精神を持たせやうと種々の迫害を忍んで説教を爲されたのである、されば日蓮を信ずる者は泣聲を出して念佛行をやる必要はない、日蓮上人は菩薩行の魁を爲されて居る、さうして一切の經文と云ふものは法華經に依つて統一されて仕舞ふ、法華經にても悪人も悪魔も、皆等しく一乘の教を受けられるのである、由來異つたものが二つも三つも生ずるのは解釋のどこかに缺けた點があるからである、完全に説明したならば一人の如來が二箇の異つた宇宙原理を説かれて居る筈がない、佛教は一箇の完全なる宇宙觀である、二つも三つも違つた宇宙觀があると云ふことは實に愚なことである、一箇完全なる宇宙觀とは上述の通

りの法華經に外ならぬ、起信論の議論も華嚴の教義も此の大理想の中へ皆入つて仕舞つて、他方を他方として別に取り除けて置けばそれで澤山である、佛教のあらゆるものは遂に一箇の大理想到達して説明せられなければならぬ、それを明かにしたのが法華經である、佛陀と云ふものも矢張り此の意味から起つて來るのである、例へば智恵ならば智恵と云ふものは絶対に達したならば一に歸する、假に佛が澤山あるにしても、絶対の智恵と云ふものは統一である、慈悲と云ふものも絶対に達したならば一に歸さなければならぬ、絶対になく力に於て優劣があつたりなどするから智恵に優劣がある、絶対に達したならば佛でも一に歸せなければならぬ、法華經は最初に先づ智恵の統一から説き始めである、即ち我も智恵は權實の二智を備へて完全である、従つて諸佛の智恵と我が智恵とは一つである、三世十方諸佛の智恵は皆釋迦の智恵と同じで背さ合うて居る、最初から釋迦の智恵が一切の佛の智恵を代表して居るのである、即ち智恵の統一を爲して居るのであ

る、又誓願慈悲の方から言ふても、矢張り同じことに歸すると云ふことを教へたのである、諸佛の本誓願は我が行する所の佛道と同じく衆生を導かんとするのであるから、諸佛の本願は一に歸するのである、彌陀の願諸佛の願と云ふやうに異つて居ることはない、眞實であるならば諸佛の本願は一に歸すると云ふことを明かにしてあるのであります、譬喩品には

「今此三界は皆是我が有なり其中の衆生は悉く吾が子なり而も今此處は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す」

詰り我に歸すると云ふことを表はしてある、皆一切經に戻りて考へて見ますに、華嚴經には一切のものは釋迦に歸すると喝破して居る、釋迦は絶対のものである、釋迦は頭を下げねばならぬとある、阿含經に於ても無論釋迦は非常なものであるとして、弟子達は絶対に服従して居る、阿含經二百卷以上あるけれども、どこを見ても非常に偉いものであるとしてある、維摩經でも門弟などが種々議論して居るけれども、お釋迦

様が一言云へば全く服従して仕舞ふ、實に非常なものである、外の者が偉い事を説いても釋迦はもう一層偉いことを表はす、例へば耆婆と云ふものがあつて非常な力を持つて居て病人を癒す、さうして高德な人であるが、御禮を決して受けない、大家で可愛一人息子一人娘の大病を癒して貰つたから、其のお禮に御馳走したいと言つても、イヤ左様ならと言つて席へ就かないて出て行つて仕舞ふ、どこへ行つても禮を貰はない、されば人々から尊敬される事非常なものである、さう云ふ大勢から頭を下げられる耆婆も、釋迦の前へ出れば全然頭が上らない、或る時耆婆を尊敬して居る者が澤山集つて何を以て貴下に御禮申上げませうかと尋ねた時、耆婆は我が師釋迦牟尼如來の許に至りみな頭を下げて其の教を聞けと言つたから、一同は左様ですかと釋迦の前に至り頭を下げて教を聞いたさうである、釋迦を非常なものとして恐れ敬うと云ふことは、どのお經にも明白に現はれて居る、般若經なども無論さうである、涅槃經もさうである、阿彌陀經なども阿彌陀



如來の誓願を種々説いて居るけれども、矢張り釋迦を除くことは出来ない、一切經の中に於て釋尊に反抗するものは一つもない、併し乍ら上人があつた通り他宗を攻撃して居るのは、他宗に於て此の法華經の統一的思想を認めざるが故である、例へば日本國民は何れも皇室の主權を認めて之に服従しなければならぬ、若し朝廷に從はないものがあれば直に之を討伐しなければならぬ、佛教に於ても釋迦を顯本し釋迦の絶對なる權威を認めなければならぬ、之に反するものは當然攻撃しなければならぬ、そこで上人は國家の力の關係に就ては天照八幡を認めて居るし、種々さう云ふことを書いて居るが、佛教觀としてはどうしても教行人理果の五法に就いて、斯う云ふ統一觀を持たなければならぬ、法華經の本文を初として日蓮宗の教義は是れが爲に他の誤りを折伏して居るのである、天台は法華經を基礎として居るから立派なものである、上人は其の天台をより以上に統一的なる完全なるものに進めたのである、此の大理想を逸したならば法華經の開顯と云ふ

ものは價値を失ふものと思ふ、然るに世には一種の思想に囚はれて教法だけは説くけれども、他はスツカリ忘れて仕舞ふて居る爲めに、狹隘固陋に陥つて居るものがあるやうであります、只今申述ぶる様な理想を以て他の佛經を御覽になつたならば、佛教と云ふものは斯く迄整頓して現はれたものであるかと云ふことを感じになるてありませう、若し大具眼者があつて日本の歴史を見たならば、建國以來今日迄幾多進化變遷の跡は、何れも日本の使命天職を果す爲の大理想に向つてなされた運動を示すものに外ならざることを看取するてありませう、日清日露の兩戰役、諸は今回の日獨戰爭も此の目的に向つて進む徑路である、佛教の各經典も皆それである、個々の經典は法華經を中心として偉大なる一の佛教を形造るのである、此の法華經を以て一切經に宗教としての眞生命を附與すると云ふ着想を除いては、他に佛教を復活するの途がないと確言致します。

# 信仰と寺院

東京美術學校教授 竹内久一

四恩教林の例會にて講話せられたるもの、記者要領を摘記したるもの也

人はパンのみを以て生きるものでなく、宗教の必要なるは今更申すまでもありませんが、人間の生活に宗教上の信仰がなければ意義ある人生の生活を營むことが出来ないのである、世には無宗教を以て誇りとして居る様な紳士もあるが、それだから節操も識見もないのである、私は元は日蓮主義者ではありませんが、然るに自分の職業が美術彫刻である處から、日蓮上人の尊像を彫刻して見たいと云ふ希望を起しまして、種々と研究を積みました結果、遂に日蓮上人の廣大なる御人格に感孚し、上人に導かれて信仰修行する様になりました、おもふに日蓮主義は現智の力を以て眞髓を得ることは出来ない、何の宗教でも信仰を認めないのはあ

りませんが、現在日本に存する宗教の中には、理論の一片に偏傾して居る内觀主義のものもある、併しそれは未だ人間の實際生活に直接交渉を缺いて居ります、精神に慰安を與ふる力がないと思ふ、そう云ふ理屈のみの宗教は吾々に何の役にも立たぬ、理屈は押し詰めれば信仰に進んで來なければなりません、信仰は精神に活力を得る事でありませうから、面白半分宜い加減では駄目である、飽迄一本調子でなければなりません、故に法華經には「一心欲見佛不自信身命」と説かれてありまして、何んな困難に逢ふて身は苦しめられても、信仰の節義を變へてはならぬのであります、即ち命懸けてなければなりません、日蓮上人は「如何



なる乞食になるとも法華經にさちをつくべからず」と仰せられて居りますが、命を捨て、懸らなければ立派な仕事は出来ません、乃木將軍が自刃して先帝様に御伴を致されたなどは、誠に清い尊い精神であります、武士道の身讀者であります、死を以て濁つて居る日本の思根界に覺醒を與へたのであります、命懸けてあればこそ不朽の感化を貼されたのであると存じます、國民は斯う云ふ立派な精神の修養を努めなければなりません、吾々は何んな職業に従事致しましても、精神の土臺に間違のない信仰を築き上げて、之を日常の生活に表はし、國民たるの本分に背かぬ様に氣を付けなければならぬ、されば一時の欲を達しようとする云ふ爲に信仰を致すものがあるとすれば、それは誤れる信仰であります、日蓮主義の信仰は大理想大活現を包んで居るのであります、小人の我欲を満足させるものではない、我々の實際生活に必要な經濟上の欲望は、正當の努力によりて得べきことは獎勵して居るけれども、精神問題を闕却して我欲を貪らうとすることを誡められて

居るのである、遺文によりて上人の思想を窺ひまするに「欲をも離れずして佛になる道の候ぞ」と仰せられて、經濟と信仰との調節を圖られて居る事は明白なる事實であります、決して一方に偏してはなりません、信心もする生活も豊かにするのでなければ、正しい信仰とは申されぬ、信心をして早く西方極樂に往生したいとか、神様に救はれて天國に行つて神の下僕となりと教ゆる宗教は、我々の崇むべき教ではありません、それから又何でも眼の前のみの利益を得様として、道理に合はない禮拜をして居るのは、これは迷信であつて宗教の價値も信仰の意味も知らぬものである、東京には寒中になりますと、白い單衣を着て身慄をしながら、鈴を鳴らして六根清淨と唱へて御寺に詣るものが多いのであります、この寒詣りをすると自分の願事が契うと云ふ事であるけれども、迷信もこゝに至つて極まれりと謂はねばなりません、斯かる迷信の對境を祭つて居る寺院の墮落は、實に驚くに堪へたる次第で

ある、寺院が人心の弱點に乗じて迷信を鼓吹するは、恐るべく誡むべき事である、寺院がそう云ふ迷信鼓吹の意味に於て使用されては迷或千萬の至りである、寺院は迷信や葬式の會場に充てるために建て、あるのではない、總ての人に道を教ゆる所である、即ち道場である、寺院建設の根本を忘れては困る、例へば惡戯をして言ふ事を聞かぬ子供なども、寺院の本堂に參れば行儀も宜くなるし、立派な精神にもなる様に教ゆる道場である、それだから廣い意味の社會的教育の學校とも云へる、學校である以上は、活動盛りの人も寺に詣りて奮闘の原動力を得る様にせなければならぬのである、御寺は抹香臭いとか、縁起の悪い葬式の場所であるなどと考へて居るものは、御寺と云ふ神聖なる意味も分り兼ねる無智を表はすのである、寺院が道を教ゆる尊い場所である上は、學者も紳士も財産家も貧乏人も、快よく參詣して教を聴き、自己の心を磨いて立派な精神となし、進んで信仰の難有さを味はなければならぬと思ひます、併し現代の宗教界は非常に混雜

して宗派も澤山に分れて居るから、何れが健全にして吾人に適切であるかは、宗教を調べない人は判定に苦しむ次第であるが、念佛宗等は消極悲觀主義で、人生を尊重せない教であるから、何の益にも立ちません、今の宗派の勢力があるからと云つて根本の教が悪ければ用へぬ方がよい、悪い方へは寄り付かぬ様にして立派な教に向つて進むのが人の人たる價値である、日蓮上人の教は、積極的に現實生活に根底を與へ、更に吾々の國家を充分に發展させようと云ふのである、日蓮主義の御寺はこの義理合を教ゆる場所でありませから老若男女を擇ばず參詣して教を聴かなければなりません、今の誤りて居る法華宗の信仰は學ぶべきでない、日蓮上人時代に復古したる清き信仰、上人の遺文を治め、進んで世の公利公益の爲に貢獻して行かなければなりません。



### 小原陸軍少將を訪ふ

(記者某日將軍を訪ひ其談する要領を摘記したるもの也)

私共日蓮主義を鑽仰致して居る所から、友人などに逢つた時、宗教の問題を語る事が有りまするが、大抵の人は宗教を研究して何か得る所があるかと論評致しますから、私は常に云ふ、いかにも得る所は非常に多い、宗教によりて吾が魂の不滅を知り無始無終の理義が解る、この意義を徹底すれば何か國家人生の爲に働かねばならぬ事を自覺する事が出来るので、こゝに人として生れ來つた面目を發揮することを得るに至るではないかと申すのである、相當の地位に進んだなら隱居生活をして、悠々人生を送らうなどと考へて居るものもある様だが、是等は不滅の意義を知らないから起るのである、人間僅か五十年の生涯であると考へるの誤り、永久に精神の我は亡びるものではない、然らば人間生活の上に精神の住所が必要である、即ち健全なる宗教が其根本基礎となるべきであると思ふ、日

蓮主義は「現世安穩後生善處」の道理を教ゆるものであるから、今世には貪瞋痴に逞はれて居る人であつても、未來には立派な者になりたいと念ふて、努力奮闘して行くのである、能く世間で言ふ事であるが、信仰心があり不道德の行がなければ、不幸な事があるものではない筈だと申しますが、吾々には必ず前世の業がある、この業のあることを考ふれば、そこに安心立命が出来る、即ち運命の自覺をすればよいのである、さう云ふ自覺が明かになると、假し人生に於ける仕事と思ふ通りにならなれて逆境に陥りても、一面に罪障の自覺があるから悲觀は起らないのみか、反てこの逆境こそ自分の試金石であると言ふ事が解る様になる、殊に逆境とか順境とか云ふのは一時的の問題で、精神上の事は永久存在の大問題である、而して此道理を鮮明に發揮せられたのが日蓮主義である、然らば日蓮主義によりて前途を開拓して行くのは、人の當然爲すべき勤てあらうと思ふ、世人が斯う云ふ明かなる道理に迷ふて居るのは、いかにも氣の毒の次第であると思ひます。

## 青島視察談

海軍少將 佐藤鐵太郎

私は此の程青島へ視察に参りましたから、此會には少し不向であります。今日は青島土産の御話を申し上げやうと思ひます、御承知の通り青島は首尾宜く我が有に歸りましたから、早速渡航して戦争の跡を尋ねたい考がありました。が閑暇がないので目的を果すことが出来ませんでした。けれども、此度漸く暇を得て青島へ行つて來たのであります。青島滞在日数は僅か三日間でありましたから、詳細な視察を遂ぐる譯には参りませぬでしたが、平素私が嫌つて居る自働車が非常に助けて呉れて、自働車へ搭乗して疾驅した爲めに頗る時間を節約することが出来ました、矢張り平素から嫌ひてもあまり悪口は言ふべきものでないと見えます、戦争

に使用された檣樓々々自働車であつたが、假令檣樓でも馬車や人車などより餘程宜しかつた、未だ戦が仕舞つて間もない頃でありましたから、青島は到る處醒い香が漂うて居ました、抑青島の在る山東と云ふ所は、如何なる歴史傳説のある場所かと申しますれば、山東省は支那に取りましては非常に古くから種々な人物を生み出したり、歴史的事實に乏しからぬ重要な所であります、其の大體を申せば、先づ孔子様は山東で生れた人であり、それから彼の孝行な曾子も其處で生れた、孟子も山東で人となつた、其他忠勇と云ふ方の側から云へば、顔真卿も山東で生れ、それから又我々の心から敬服して居る諸葛孔明は、恰度エヌ九十號が擲



座した海岸から直ぐ臨んで生れた、尙王義之も矢張り山東の人である、此の外我々軍人の尊敬して居る所の孫子、吳子、司馬穰直と云ふやうな兵學の大家あり、又大公望の封ぜられたのも山東の地でありませう、尙此の外にも斯う云ふ偉人傑士を澤山出してありませうが、一寸私の頭に浮んだだけでも斯う云ふ人々があります支那の史上を飾る是等の大人物を生み出したことを考へると、山東と云ふ所は餘程趣の深い土地でありますそれから、莊子なども山東に住んだし、范蠡が致仕して越を去り陶に行き陶朱公となり、富巨萬を積んだと云ふのも山東でありませう、斯の如く多くの先覺者を産み思想上歴史上重要なる人物を出したにも拘らず、今日は獨逸に取られ更に又日本の手に移ると云ふ風な山東となり、其の人民は支那中で殆ど一番貧しい方でありませう、山東の支那人は年々滿洲方面に出稼に赴き、滿洲に止まるものもあれば又歸るものもあります、其の歸る者とても、多くは博易やなんかの爲素寒貧になつて滿洲に居られない者が惜々歸ると云ふ有様であ

る、刺へ土地は瘠せて居り一向味ひのない所でありませう、如何に多くの先覺ありて後輩の爲に立派な訓戒を興へて置いても、後繼者がいけないと云ふと何にもならない、我が日蓮上人は我々の爲に立派な教を授けて下さいましたけれども、我々即ち二陣、三陣、四陣の和黨共が大に奮發しないならば、矢張り今日の山東省の如くなりませぬかと云ふやうな感じも起らぬてはなかつたのであります、青島は何故に獨逸に奪はれたかと云へば是は極めてたはいもないことがらで、彼の邊に居た獨逸の宣教師が暴徒の爲に殺害されたのを理由として取つたのである、其の取る手段は何とも言ひやうのない程不都合極まる取り方をしたのである、ザット申せば、獨逸の宣教師が殺さるゝや、獨逸の軍艦が急遽青島へ來航した、すると青島にある支那の守備兵は之を歓迎する積りで獨逸軍艦の乗組員を招待した、さうして御互に御馳走を喰つて獨逸人は知らぬ顔をして居乍ら、其の間に總ての準備を整へて急に兵を上陸させ、三時間か四時間の短時間に立退を命じて少

しの猶豫も與へないで、沒義道なことをして取つて仕舞つたのであります宛て居直り強盜であります、最初はニコニコ顔で何の悪意もなさうに見せて、座敷へ通り俄に主人の胸倉を捕へる強盜と少しも異ならないのであります、日本の學者は大變獨逸を崇拜して居るから、餘り獨逸を攻撃することはいけないか知れませぬが、大體獨逸人は野卑である、思遣りが無い、野蠻な色彩の多い國民である、餘りに舌幅が廣いやうな言い草であります、元來歐羅巴の文明は野蠻の文明である、それに就いて思ひ出すのは、嘗つて私が英吉利に駐在中、或日私の宿泊して居る家庭の主人に「歐羅巴の文明とは一體どんなものか極く明瞭に話して呉れ、どうも我々の考と大分違ふやうだが」と言つて種々打解けた話の末に彼の言ふには、歐洲の文明は恰度此の圓い珈琲茶碗の縁の或る一點から出發したやうなものである、文明は此の縁を次第次第に進んで極度に達すれば遂に元の出發點の近くへ到着する、即ち歐洲の文明は元の野蠻時代より非常に進歩して居るやうに一見

思はれても、實を言へば其の裏を見ると元の野蠻時代と相距ること遠くないのである、正面から見れば遠い様でも皆合せの一枚紙を剥けば元の野蠻である、世の中の進歩するに従つて珈琲茶碗の縁は段々大きくなるけれども文明と野蠻の裏面的關係は同一である、畢竟文明と野蠻との距離は紙一枚で、後を見れば直ぐ野蠻になるのだと言つた

文明の進歩方向

野蠻時代

非常に面白い譬喩だと思つたが、私は大に威張つてやつた「日本の文明は直線の文明である、山へ登るるやうに段々高い所へ進んで行く文明である、進めば進む程野蠻とは遠ざかつて行く、珈琲茶碗の縁を辿る様な曲線の文明は一向有難くない」と言ひました、今度の歐羅巴の戦争を見ても、獨逸人などは野蠻人と雖も敢てせざる程の殘忍酷薄な事を平氣で行ふて居ります、十二月二十





日發行の伯林ボストの社説によれば、彼等の動作が非常に能く分ります、其の社説は「殘酷なれ」と題して敵に對しては絶へず戦争の峻烈なることを示す必要がある、村落を破壊し、運輸貿易等を杜絶し出來得る限り壓迫を加へよ、戦争は敵國民を苦しむ事大なるによつて其の目的を達し得るのである。奪掠可なり、非戦闘員の殺戮又大に宜し、これを人道的戦争と云ふ、要するに敵に對して世人の言ふが如きなまぬい人道的であつたならば唯、戦を永く遷延させるばかりである、これが爲めに拂ふべき犠牲は愈々増加するのである、敵に對して最も殘酷なれ、最も沒義道なれ其の戦闘員たると非戦闘員たるを問はずと力説して居ります、従つて斯の如き戦は到る處に行はれて居る、戦争と云ふものは敵を殘酷に取扱へば宜いのである、殘酷に取扱ふ爲め敵の後悔心を促し、戦争は早く終熄すると云ふ論法で非常に獨逸は殘酷を働いて居ります、此の間の時事新報を讀みのお方は御承知でありませうが、今回の戦争に於ける獨逸の亂暴根柢を極めた狀況を調

査した結果の悲惨なる實例が詳細に記述されてあります、實に獨逸の遣り方と云ふものは何とも批評の出來ない程野蠻である、文明の進歩は世の中に善いことも齎すけれども、一方に於ては又好ましからざる現象をも伴ふものである、昔の戦争よりも今日の戦争の方が餘程殘酷である、萬一日本が獨逸のやうな歐羅巴の大國と戦ひ、外國の兵が日本内地に侵入するが如きことがあつたと假想したならば、現今白耳義が禁つて居るやうな何とも言ひやうのない蹂躪を受けなければならぬことになる、之を考ふれば、どうしても戦争は負けてはならぬと云ふことを痛切に感ずるのでありますそこで斯う云ふやうに獨逸人が、宛然居直り強盜の態度で青島を奪いました、其の後の經營振り如何と云ふに、此の點は大に意を用ゐられてあつたことが分る、立派な市街を建設したばかりでなく、總ての事を非常に能く注意し總ての方面に向つて發展するやうに計畫されてあるのであります、一例を挙げれば、支那人の甘心を失ふては可けないと云ふので、立派な青島

市街の道路に特に支那人の爲めに一輪車の車道を設備したのであります、二輪車へは荷物を案外多く積載しても車の輪が二つあるからして重量が平均せられ路面を破壊することは比較的に少ないけれども、之に反して一輪車は道路を破壊すること甚だしいものであります、獨逸人は此の汚い支那人の一輪車の爲に立派な道路を破壊さるゝを惜しみ、特別に道路の脇に幅一尺位に石を敷いた道を設け一輪車は其の上を通行しなればならぬやうになつて居る、唯無暗に立派な道路を壊はしてはいかぬ、支那人は勝手次第に道を歩いては罷りならぬ、命令したとて駄目だから、一本道を作つて其の上を車が通るやうにしてある、一方に或る制限を加ふると共に、一方には相當な設備を施して困らぬやうにし支那人を怒らさぬ様種々手心が用ゐられてある次に青島に入るもの雖しも感ずることは、支那人町の方から獨逸人の市街を望めば、如何にもあそこには優等人種が住んで居ると云ふ思を浮べることである、獨逸市街は高い所にあるから、何となく上の方に住ん

て居る人は自分よりも優等なものが住んで居るかのやうに感ぜしめる、其他萬事に綿密なる注意を拂ひ、鐵道の聯絡港灣の擴張等知らざる所なしと云ふ有様であります、それから獨逸人は如何にして青島を棄たかといふに、歐羅巴に於ける野蠻的な獨逸人の行動と等しく、敵には何物をも渡すまいと云ふ卑劣な行動を執つて居るのであります、先づ第一に文明の眼から見ると一番必要な燈臺の如きものは、軍事上には殆ど何等關係がないものである關係があることは燈臺に黙火すると云ふこと、滅火すると云ふことである、何も燈臺自身は武器ではない、然るに獨逸人は常に其の燈臺の燈火の設備を破壊せるのみならず、燈臺の一番下の基礎から爆發薬を以て破壊し去つて居る、此の一事を以て獨逸人の心理を窺ひ知ることが出来る、又電柱などは立て、置いても好ささうなものであるが、是又悉く爆發薬を装置して打ち倒して居る、それから官有物と私有物の關係を誤魔化して居る、さうして何物も敵の手に委ねまいとして居る、穿ち過ぎた觀察か知れま



せぬが、測候所へ行つて見ますと望遠鏡などの容器は大分残つて居りますけれども、中は一つもない、寫眞器などもありませんから見ますと、機械はあつても玉は抜いて仕舞つてある、要するに何物をも敵に渡さない出来るだけ壞はして渡す、斯う云ふ處置を取つたやうであります、實に陋劣なことでありまして文明人としてあるまじきことと思ひます、それから青島の防禦設備であります、旅順を取りました時には旅順の防禦は誠に雄大であつたと評して宜いと思ひます、荒削りにして作つたと云ふやうな有様はなかつたてはありませぬが、兎に角規模宏大でありました、所が青島へ行つて見ますと少しもさう云ふ觀念は起りませぬ、如何にもコセコセして雄大と云ふ感じは生じない、さうして鐵條網などが夥しく張り廻されてあつた、さうして日本人はどんな所から上がつて来るか分らぬ、白樺隊が恐はかつた、決死隊が恐はかつたものと見えて、どんな所でも鐵條網が張つてあつた、あの棘々した鐵條網が到る處に廻らしてある、我々の眼から見て此様な所

に設けるのは徒勞だと思はれる所迄やつて居る、此處も彼處もと云ふ譯で、恐はい恐はいと云ふ感じがあつたからどんな處にも鐵條網を張つたが、其の代り大切な所に向つて雄大な計畫を忘れて居る氣味がある、砲臺其他の如きは旅順と較べれば無論見すばらしいものであります、成程永久築城をやりまして中に隠れて居る處は良く出来て居りますが砲臺の肝心な所は旅順などに比べて見ますと頗る詰らないものであつた、是は皆様には興味少ないことかも知れませぬが、私は非常に面白く思ひましたから一寸申上げますが、旅順の時は砲臺の中腹の斜面に三十尺位である非常に深い塹壕を掘り、一方からこれを掃射する様にして到底此處を打越へて日本兵が進んで行くことが出来ないやうになつて居つた、そこで日本軍は之を爆發薬で爆破させた後、吶喊して砲臺を奪取したのである、其の防備は堅固なものであつた、處が獨逸の青島の砲臺の斜面は、所々に階段の如きものを設け段落を作り、下方より砲臺へ向つて突進し来る敵兵は砲臺上より極めて明

白に瞰視し得る様計畫したのである、而して此の段落を爲して居る箇所は、一丈から一丈四五尺あつてそこへ鐵條網を張る、到底日本兵が進んで来られないやうにしたのである、此の砲臺を如何にして陥落せしめたかと云ふに、日本の砲撃盛んになるに従つて彈丸は自然此の段落の角へ命中し、忽ち此の一角が破壊せられてダラダラとなる、爆發熾烈の偉力で土砂を飛ばして鐵條網まで滅茶々々にして仕舞ふ、それであるから日本兵が此處迄進んで来るとダラダラと壞はれて居るからそこを通つて進むと云ふ具合でズルズルと砲臺の頂上へ達するを得たのである、こうして獨逸の誇つて居た砲臺も易々と落ちたのである、一番先に砲臺を奪取した某隊の話を聞くに、一個中隊の兵士抗道を掘鑿し乍ら進んで来たが、此の段落の處を爆破しやうとすると既にガラガラ壞はれて居るから、其の儘ズット進んで行つた、併し一寸も敵兵が居ない、居ない筈だ敵兵は皆砲臺上部の隱蔽部の中へ入つて小さくなつて居たのだ、日本兵が上つて来たなら直ぐ出て射てば宜い

のに、我が勢に辟易して長い間隠れて出なかつた、誰一人敵らしいものは居ない、何處に敵が居つたか分らないと云ふ有様で搜して居つた、當時の報告中にも、「敵砲臺に人無きもの如し」と云ふ文句があつたといふことである、其の中に何だか下の方に人が居る氣配がすると云ふので、騒いで搜して見ると大に居る、其の穴に一中隊の敵兵が入つて居たから一中隊で一中隊の敵兵を俘虜にしたと云ふ勇ましい物語である、斯う云ふ始末で青島は忽ち陥落して仕舞つた、其の元はと言へば、此の段落の處が容易く破壊されたのが大なる原因であります、もう一つ都合が良かったことは、其の邊の土質が頗る軟弱で手を入れて掘れるやうな所であつたから、抗道掘鑿作業が非常に容易に出来た點である、是に就て私が聞いて流石日本人は勇敢無比であると思つた事は、此の抗道を掘つて進むには土を掘り上げて高くする、高くして人間の丈の高さ位にして段々敵から射撃されぬやうにして進んで行くものであるが、土を高くする時に日本の兵隊は此の高い所へ上



つて地踏をすると云ふ、敵が向ふから狙つて居るがそんなことは一向構はないで、敵前に曝露した隠蔽物のない所へ出て悠々土を踏み固める、さうして敵が打出すと「ハ、打ぞ〜」と笑ひながら抗道の中へ降りそれからまた掘つて又上つて地を踏むと云ふ風に、敵を呑んで蒐つて居ると云ふ風であつた、我が陸海軍の將士は皆此の勇氣と膽力とを備へて居るのである、此頃戦争が済んで以來澤山水雷を處分して居りませんが、水雷の處分をするのに此頃は日本でも寒いけれども、青島は尙更に寒い、寒いと云ふよりは痛い、氷などが非常に厚く張る、斯る凜烈たる寒氣にも拘らず、掃海作業中水雷を發見すれば直に海中に飛込んで泳いで行つて水を潜つて水雷に綱を附けて來るさうであります斯う云ふことは逆も外國人には出來ぬ藝であらうと思ひます、此の獻身的な行動には私は非常に感服しました、斯る日本兵であるから始終紀律蕭然として少しも非難の聲を耳にしなかつたのである、青島陥落の迫つた時、背面の敵砲臺は思ひの外早く取れて仕舞つたが

つたらうと思はれる程棄てる事壞はす事を完全にやつて居ります、日本人の考ならば刀折れ矢盡きて降参し城を明渡すと云ふならば、あまり見苦しくしないで敵に渡すのが禮儀であると思ひますが、そんな事は全然彼等の頭になく唯少しも敵に渡さぬやうにと骨を折つたのである、さう云ふ譯であるから、官有物と私所有物の關係を巧く誤魔化して居たので、我軍は澤山の官有物を押収することが出來なかつた、又敵の兵隊が非戦闘員に化けて居たことが分つて後に澤山の捕虜が出來ましたし、官金で造つた建物なども帳簿上の不備から發見されて數十軒の家屋を一時に取ることが出來たといふ風であります、斯う云ふ風で萬事陋劣な遣り方をして居た、以上は大體青島の獨逸の側のお話してあります、次に青島占領後の日本人側のことを申し上げます、青島入市許可以來、日本人は今日迄既に約一萬人も入り込んで居ります、誠に盛と言はなければならぬ、最初私が聞きました所に依れば、青島は日本人が取つたが宛然元の獨逸人の手に在るやうであつて、あ

獨逸軍は無論降伏と覺悟をしたので、前から色々のものを壊して仕舞、日本軍が占領して見ると敵砲臺には一つとして完全なものはない、皆非常に大破して居る勿論是は日本軍からの砲撃が猛烈であつたのにも依るが、それは比較的少くして皆敵が自ら爆發したのであります、其の爆發の仕方は中々念が入れてあつて、唯砲臺を使へないやうにして敵に渡すまいとしたばかりでなく、砲臺の一番下の基礎へ爆發藥を裝置して爆破したから、總てのもの悉く破壊されて根本より滅茶滅茶になつて仕舞つて居る、元の砲臺に復舊するには新たに築城するより以上の經費を要すると云ふ非常な有様である、此の點より考ふれば、獨逸は再び青島を我が手に收めると云ふことは思つて居なかつたと見えるそれと同時に日本には決して之を利用させまいと云ふ念慮の強かつたことが分ります、艦船を瀑沈し浮船渠を沈め、其他倉庫に收めてあつたものを破壊した方法など實に注意周到なるものであります、あれ程破壊に盡力する位ならば寧ろ其の力を防禦に用ゐたら宜か

そこへ行つて見ると西洋人ばかり濶歩して居て日本人は少いとのことでありましたから、或はさうかも知れぬと思つて行つて見ると、殘つて居る獨逸人は僅かなもので、馬車を縱横に驅つて居ると云ふやうなことは見當らなかつた、私の青島滞在三日間中に、三四回獨逸人が市街を歩いて居るのを見たゞけて、獨逸人は全く閉塞して仕舞つて日本人は大分威張つて居ります、併し其の一萬近くの日本人は一體どう云ふ人間であるかと云ふに、情けないものばかりである、極端に申しますれば、臭いものに蠅がたかつたやうな風である、皆蠅のやうな人間である、何かありはせぬか何か喰ひものはありはせぬかと寄り集まつた者ばかりである、技術もなければ財産もなく、唯青島へ行つたら何かあるだらうと云ふやうな連中である、泊つて居る錢もななく官憲の惠に依つて一晚五錢の官設木賃宿に泊めて貰ふ有様である、それから自分で骨を折つてやらうと云ふ者が極く少なく、例へば料理屋を開くから權利を得たいと其筋へ願出て許可される、それでも自分で料理



屋を開かない、次の人の来るのを待つて居つて、新しく来た者に権利を賣つて其の錢を儲けやうと云ふ連中ばかりゴロゴロ轉がつて居る、一攫千金を夢見て居る者ばかりである、青島開市以來、數月にして新たに出來た料理屋や如何はしい家が百三四十軒ある、軒下に「御手輕御料理」など、書いた看板の家が多い、要するに互に皆悪いことに導く共食ひの者が多い、山東て富を作つた范蠡を私淑して、范蠡以上の富を爲さうと思つてドシドシ渡航するの知れませぬが、今日の山東は其の土着の支那人ですら山東に居つては相當の勞働をして富を爲すことが出來ないので、年々滿洲に出稼に行く位である、そこへ日本の貧乏者が行つて自分の勞力を以て立たうと云ふのは飛んでもない話である、此の寒中に水に浸つて膠州灣内に爆沈せる艦船引揚の仕事に従事して居る支那人は、朝から晩迄働いて二十五錢の勞銀で満足して居る、高くても三十錢を超さぬ、さう云ふ處へ日本人が行つてどうして競争が出來やう、お先眞暗で青島へ飛出したが、皆儲かる仕事

戦争にばかり上手でなく、戦後の總ての經營も上手にやりたいものである、どうか支那人をして「獨逸人は沒義道なことをして青島を取つたが、其の後の處置を見ると確に自分より優等である、日本人は立派に青島を取つたが取つて以來の行動はどうも自分達より劣等である」と云ふやうな感ぜを起させないやうに努めなければならぬと思ひます、昔孔子孟子等を出し種々立派な歴史を以て後繼者に教を垂れて居る山東省も、子孫の者が奮勵努力しないならば斯う云ふ外國の爲に取られるやうな憐れな結果に陥る、私は此の青島視察に依つて先覺者が良い手本を示して居ても、後の者が悪いと何にもならぬと云ふことを痛切に感じたのであります。

事はなし、歸るには旅費がなく、詰り五錢の木賃宿の御厄介になると云ふ誠に見すばらしい恰好であります勿論その内には立派な人もあるけれども、又戰勝國の餘威を借りて威張り散らして支那人に對し宜からぬことをする者もあると言ひます、斯う云ふ日本人ばかり行つて居つては支那人に輕蔑せられ、其の感情を悪くするに至るのは當り前の話であります、獨逸人がやつたやうに支那人の甘心を得て自分の計畫を進むると云ふのは大分違つて居るやうである、て大體から觀察すれば青島へ渡航する日本人の多數は、自力を以て立たず他のお蔭を以てやらうと云ふ者ばかりである、詰り他力主義の人間のみで、自力即ち自己の力を盡した後他力を願ふと云ふやうな抱負のある人間は居ない、誠に慨嘆に堪へない、早く此の種の人間が減つて堅實なる日本人が根據を占むるやうにしたいものである、青島は是から後果してどうなるか分りませぬが、私が青島灣在三日間の中に感じましたことは以上申述べた通りであります、希くば青島を立派に取つた以上は、

### ◎天晴會講演録

いよく發行、目下申

込順により發送中也、本書は本誌に廣告せし如く八百餘頁の大冊にして、其の内容は講師が多年鑽仰の結果を發表せられたるものなれば、日蓮主義者としては、必ず一本を購ふて通讀すべき責任ありと信ず、本書を讀まざれば進歩せる日蓮主義の解釋に接するを得ざるべし、殊に風教刷新人心指導の任に在るもの、一刻も早く本書を讀破すべき事を。

### ◎立正安國論略解

柴田師が立正安國主義普及の爲め、雄麗の文辭を以て通俗的に說けるもの、日蓮主義の一斑を知らしむるには尤も適當有益の書なり、價安ければ施本に宜し。



# 吾が信仰の經歷

愛國生命 鹽谷時重  
保險會社 監事

## ▲信仰的教育

私の両親は熱心なる日蓮主義の信仰家でありましたから、幼少の時よりつねに題目の聲を聞きながら、母の懷ろに眠つて居りましたが、人生無常の風は吾が家庭に吹き荒びまして、私が四歳の折父は亡くなりまして、其後母は一層強盛なる信心を致されて父の菩提を弔はれて居つた様な次第で、私は誠に寂しい家庭の一人子として母の手に撫育されました、それ故に自然に母の感化を受けて子供心にも難有い氣持が起る様になり、母が題目を修行する時は一所に唱へたのであります、私は二十四歳の時群馬縣の下仁田と云ふ處に居りましたが、或動機から耶穌教が文明の教である様に思ひまして、之

に加入して講義を聴かうとした事もあつたけれども、赤兒の時代より養はれたる信仰的教育の力は、其誤れるを覺りまして更に大に日蓮上人の偉大なる信仰を勵んで居りました、當時此の地に植木職の人で非常に熱心なる信者があつて、盛んに題目を唱へて居りました其人が漸次同信の者を集める様になり、後に本門法華宗の教會所を設置さるゝ事になつた、そこで教會所て布教師の講演がありました時、深く私の心に響いた靈感があるのであります、それは信仰の難有味は純一でなければならぬ、從て其對境とする本尊は紛雜を許さぬ、日蓮上人の教示に倅らぬ信仰を屬さなければならぬ、迷信は上人の嫌ふ所であると云ふ旨趣を聽さまし

た、其時迄は稍や雜亂的信仰でありましたから、深く之を取つて斷然改めました、私自身に於てはその時が信仰の維新とも云ふべきでありました、爾來純一の信仰に入る事を得まして、何等の變化なく現在の信念に住して居るのであります、私は常に日蓮上人の慈悲愛護に導かれながら、現在の生活を營んで居ることを自覺して居るのである。

## ▲信仰の力

私は新様に堅き覺悟を以て信仰を致して居りますが、宗教の信仰と人生の生活は如何に密接なる關係を有するかを氣付かざる人々は、自分を宗教狂だなど、冷評するものもありませんけれども、信仰の力は偉大なる權威を持つて居りますから、自己の信念にして堅實熱心であるならば、何の日か必ず冷評せる人をも覺らしむる時機があると思へば、そこに限りなき希望と愉快が湧いて來るのである、信仰の力は絶對であるから、いかに反抗するものがあつても最後には屈伏して合掌せずには居られないと信ずる、私の妻の實家は眞言宗である、歴史

習慣に因はれたる佛教信者の家庭をして、所謂宗旨替をさせるのは容易の事ではありませんが、私は日蓮上人の御教の卓越せる所以を強論力説致しまして、遂に妻の實家は法華宗に改宗致させました、現在は房州館山の顯本法華宗本蓮寺の檀家になつて居りますから、信仰生活の上に悦びに堪へぬ次第であります、併し之は私の力ではなく、確かに日蓮上人の攝化であると信じます、故に吾が心に一點の疑を入れずして、御教のまゝに修行すれば功德が現はるゝものであると思ひます。

## ▲現證の利益

と云つても、今日世に行はれて居る迷信妄信を加味したる利益ではありません、純一の信仰は無限不可思議の力がある、神秘的に廣大なる功德の存するは日蓮上人の教ゆる所自分は二十八歳の時、信仰によりて現實に利益を得たのであります、それは身體の工合が悪く腰部が痛くて苦しくて仕方がありませんので、知り合の醫者に診察して貰つた處が、此の腰の痛むのは横痃ではあるまい



かと云ふのでありましたから、自分はとう云ふ不身持を致した覚えがない、そんな譯がないと決めまして、家に歸りて御本尊に向ひ奉り、安息香二本の時間を一心不亂に汗の出るほど聲高々と題目を唱へました、修行を終りますと、耐え切れない程痛かつた處は何の氣もなく癒つて仕舞ひました、のみならず反て心は爽快に元氣が付いて参りました、其時から今日迄一度も痛んだ事はない、私は之を信仰による現證利益であると感じ居るのであります、勿論醫藥を斥くる考へてはない。兎に角純一の信仰に依りて感應道交の聖意を味ふことが出来ました。

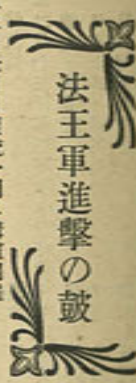
▲同信者の會合

私は二十九年東京に出て参つたものであるが、當時本門法華宗には八品講と云ふ組織がありましたけれども、この講社は日を逐ふて衰運に傾きまします、同信の相談によりて信行講と云ふのが起りました、一月月に會員の住宅に御講を九回程開くことにしたが、其説明が専門的であつた爲に普通人には少しも解らないと云ふ有

様で、そこで其方法を改めて毎月二回の講演を開くとし、通行者が聞く事の出来る會員の住宅を選んで開催しようと云ふ相談會を、三十九年一月自分の宅で致しまして、下谷の本光寺で發會式を挙げた、それが今日の正隆會であります、本門法華宗は東京市内に二三ヶ寺ありますが、各寺院には新らしき布教の設備はありませんが、此會が同宗に於ける東京の布教中心とも云ふべきであります、私共は微力なるものでありますから、天下を驚動せしむるやうな大運動は出来ませんけれども、至誠以て斯會の發展策に就て努力致して居るのであります、今や日蓮主義勃興の時代に會して居る、各人の職業は同一ではありませんが、信仰の極致は共に相通ふて佛様の愛護を受けて居るのであるから、異體同心の聖訓を奉じて、主義の發揚に努めなければならぬと思ひます。

日蓮主義者の信仰は、其日常の生活が信仰の發現でなければならぬのであるが、此の自覺と確信を以て一身を處して居る次第であります。

法王軍進撃の鼓



- ▲二月七日日曜統一閣に講演開催
  - 日蓮主義の信仰 高木 本順
  - 日蓮上人の處世訓 井村 日成
  - 壽意品と開目抄 本多 日生
- ▲八日午後七時品川本榮寺に日教義會講演
  - 日蓮上人の信行 高木 本順
  - 日蓮上人と鎌倉史 笹川 日堂
- 講演後實川延三郎の日蓮劇あり
- ▲十一日午後七時大森町板倉方妙道會講演
  - 自己存在の意義 笹川 日堂
  - 佛敎の最要義 本多 日生
- ▲十四日統一閣に開講
  - 我死生を踏進せよ 三上 義徽
  - 日蓮主義の安心 關田 日成
  - 壽意品と開目抄 本多 日生
- ▲十五日午後六時小石川白山前町白山會講演
  - 守株而待兔 眞井 本光
  - 日蓮上人の思想概観 三上 義徽
- ▲十六日統一閣開演
  - 日蓮上人傳 關田 日成
  - 如何に感字すべき 本多 日生
- ▲十六日午後一時妙國寺宗臨降誕會奉行
  - 近世哲學の趨向と法華經の眞價 笹川 日堂
- ▲同日午後七時品川高木方に講演

- ▲廿日夜淺草藤井町弘通所に佛敎革新演説を聞く
  - 傳曲れば影斜也 吉田 聖晴
  - 日蓮上人の信及び行 神谷 本善
  - 國を死して法を弘む 高木 本順
  - ▲二十一日午後一時日本橋小傳馬町身延別院に於て本化記者團講演を開催
    - 死生と日蓮上人 山名 日宗
    - 摩訶日本主義 三上 義徽
    - 薩尼御前を拜讀す 兒島 安達
    - なせ日を拜むか 加藤 文雄
    - 安住 關田 日成
  - ▲同日午後統一閣日曜講演開催
    - 宗教と國家及び我 吉永 義彦
    - 日蓮上人の處世訓 井村 日成
    - 壽意品と開目抄 本多 日生
  - ▲二十七日午後一時品川本光寺開祖報恩修行
    - 日蓮門下統合と日什大正師 關田 義叔
    - ▲廿八日統一閣開演
      - 生の欲求 牧田 英明
      - 經卷直授 武田 顯隆
      - 聖訓講話 三上 義徽
      - 薩尼御前を拜讀す 兒島 安達
      - 感化の力 石田 顯隆
    - ▲五日夜淺草永住町妙經寺四恩教林例會講演
      - を開演し野口日主師等の信仰講話あり法益多大なりしと云ふ
    - ▲七日統一閣日曜講演

京都

- ▲二月一日妙滿寺に國議會を修す會を開く
  - 法華經の大意 川崎 英照
  - ▲七日京都總訪會社支店に修養會を開く
    - 完全生活の要義 川崎 英照
    - ▲九日午後一時正行婦人會を開く
      - 實存論 川崎 英照
    - ▲同夜同志會を西洞院北村方に開く
      - 感應 川崎 英照
      - ▲同日出兵と日蓮主義 川崎 英照
      - ▲十日日本正寺に婦人會を開く
        - 初心成佛抄の大意 石井 寛俊
        - 出家功德抄の大意 金光 孝碩
        - ▲同多成院に護正會を開く
          - 無量義經の大意 川崎 英照
          - ▲十三日妙滿寺報恩會を修行
            - 信仰の歸一 川崎 英照
            - ▲十四日日本壽意寺に例會演説會を開く
              - 合理的信仰 金光 孝碩
              - 釋尊の本願 萩原 啓門
            - ▲十五日夜妙滿寺に天晴會の例會を開く



開會の辭

西村喜一郎 萩原 啓門  
 山田 三良  
 金光 孝碩  
 萩原 啓門  
 石井 寛俊  
 川崎 英照  
 萩原 啓門  
 川崎 英照  
 萩原 啓門  
 石井 寛俊

法華經の國家觀  
 廿廿日夜學生研究會を開く  
 法華經勸持品の大意  
 法華大觀  
 廿五日妙滿寺に開山日什大正師の正當會を  
 修し

大阪

二月十二日午後六時生玉寺町堂開  
 寺に例會公開演説  
 信仰要義  
 法華色讚  
 佛敎觀  
 二月十三日夜西高津中寺町蓮成寺に開會  
 婦人と佛敎經  
 日蓮主義と國民生活  
 日蓮門下の統合

三好 信道  
 京華 義應  
 堀木 日種  
 三好 信道  
 京華 義應  
 堀木 日種

岡山

二月一日和氣在山田村岡本善四郎  
 宅開會  
 三寶に於て  
 婦人の責任  
 法華經と國民  
 十五日日本成寺に婦人會開會  
 死生觀  
 十六日本成寺同心寺開會  
 佛敎二教の靈觀  
 十九日赤磐郡草生久我寺にて開講  
 開會辭  
 佛力と信念力  
 二十日同久成寺に開會  
 健全なる不滅觀  
 廿七日日本成寺に開山會法要  
 大正師の事業

須波 廣吉  
 總野健三郎  
 原田 日男  
 原田 日男  
 原田 日男  
 原田 日男  
 原田 日男  
 原田 日男  
 原田 日男

久留米

東京天晴會員宮岡海軍中將の九  
 州下向を機として二月廿日午後  
 一時中學明善女學校大講堂に於て教育會員を  
 中心とし一般聴衆の爲め日蓮主義を説き同日午  
 午後七時本泰寺に大講演會を開けり尙中原師  
 は英前方面には新野井上野瀬安達四氏宅に於

て家庭講話久留米に於ては平岡いの宅平岡廣  
 作氏宅に於て市外に於ては廿八日城戸運動氏  
 宅に於て寺院に於ては十二日及び廿六日の二  
 回平岡本信の前講に於て講演を爲せり  
**千葉** 軍隊講話本法華宗本多日蓮師は  
 中村日蓮師を隨へ二月八九兩日千  
 葉縣所在鐵道縣隊陸軍歩兵學校佐倉五十七聯  
 隊に出張精神講話を爲せり八日午前十時鐵道  
 聯隊將校の爲に  
 軍人精神 本多 日生  
 約一時間半講演午後一時同聯隊兵士の爲めに  
 德永隊長の紹介にて  
 國民精神 本多 日生  
 約一時五十分講演直に陸軍歩兵學校練兵場に  
 約八百の將校生徒の爲に  
 國民精神 本多 日生  
 約二時間の講演を爲し校長其他の見送を受け  
 演野本行寺に一泊九日午前八時四十分演野發  
 同十時五分佐倉着佐倉聯隊副官前田管事日暮  
 布教師因幡鈴木田邊の各師及び日蓮宗妙社寺昌  
 柏寺等の出迎を受け聯隊副官の先導にて一同  
 騎車聯隊着同管行社に入り同聯隊七十餘名の  
 將校の爲に  
 軍人精神 本多 日生  
 中食後聯隊兵士二千餘名の爲に  
 國民精神 本多 日生  
 講演終了後時間の餘裕ありしを以て將校の希  
 望により  
 軍人精神(第二) 本多 日生  
 同夜佐倉青年會主催の精神講話會に臨席約六  
 百餘名の聴衆の爲に

青年の修養

會場は開華亭と稱し相應の會場なるも禮堂滿  
 場の感況にして宗教演説として佐倉開始以來  
 の感會なりし本會開會に對し佐倉本宗寺院日  
 蓮宗寺院及天臺宗寺院の盡力多きを認めらる  
 終了後演説に一泊聯隊長及本宗寺院各師及び日  
 蓮宗寺院其他權信徒の訪問を受く翌十日八時  
 三十分發汽車にて田邊西郡其他の見送を受け  
 歸京せらる

二月二十九日長生郡度原町に道路布教開會  
 秋山乾茶竹内顯道氏講演せり  
 二月一日同郡國府岡成寺に於て午後六時  
 幻燈會開會河野見中山田誠心竹内顯道氏明す  
 七日同郡山崎王寺にて午後六時幻燈會開  
 會山田誠心河野見中竹内顯道氏明  
 十二日同郡押日來光寺にて早朝より梵鐘を  
 鳴らし來會を求め午後一時唱題を修行後  
 信仰の心得に就て 山田 誠心

十四日度原道布教開會秋山乾茶竹内顯道  
 山田誠心浦井常慶講演せり  
 十五日午後南廣川青年會春期總會講演  
 菩薩行としての農業 小竹 俊 雄  
 十六日上越小關妙覺寺に養正會講演  
 日蓮主義 小竹 俊 雄

廿三日山武郡清名寺谷本淨寺に於て從來積  
 金を基本として梵鐘及佛前用花燈品を購求す  
 ることに決し之が調製を了したるに於て總代石橋  
 片岡等の諸氏之が開帳供養を行ふべく午後一  
 時法要終つて講演を開く  
 開會 板倉 通 猛  
 所感 土屋 眞實 國生

梵鐘と修養

廿五日午後七時南川芳徳寺講演  
 信仰の力 小竹 俊 雄  
 二十八日午後一時山武郡豐成村御門妙善寺  
 報恩會を開會せり  
 開會の辭 佐野 日 攄  
 日蓮主義の修養 土屋 眞 容  
 三月五日午後南廣川青年會講話會に開講  
 開佛知見 小竹 俊 雄  
 七日午前御山日經上人講前に於て講演  
 大信仰御確立記念 小竹 俊 雄

教學財團基金受領報告

(第四十八回)大正三年九月十九日迄到着)

金拾圓也 郡山常光寺住職 川崎 本照  
 金拾圓也 廣島本照寺住職 大橋 日鏡  
 金拾圓也 廣島本照寺住職 中村會道  
 金拾圓也 廣島本照寺住職 齋藤新太郎  
 金拾圓也 早稲田正法寺住職 安藤 日莊  
 金拾圓也 大阪堂園寺住職 淺中安次郎  
 金拾圓也 阪路妙立檀家 淺田 喜助  
 金拾圓也 郡山常光寺住職 川崎 本照  
 金拾圓也 大豆戸本榮寺住職 前田 日眞  
 金拾圓也 國吉妙理寺住職 金阪 學信  
 金拾圓也 新所妙理寺檀家 内藤 正一  
 金拾圓也 廣島本照寺住職 大橋 日鏡  
 金拾圓也 廣島本照寺檀家 淺中安次郎

金壹圓也 阪路妙立寺檀家 淺田 喜助  
 金六拾圓也 太田長田長照寺 江野澤榮全  
 金拾圓也 大成立立寺檀家中  
 金四圓也 京都邊行福寺檀家中  
 金貳圓也 耳原法華寺檀家 山中 通榮  
 金拾圓也 同上 吉田善之助  
 金貳圓也 佛信行寺檀家 萩原吉十郎  
 金壹圓也 同上 萩原 幸作  
 金拾圓也 同上 萩原太左衛門  
 金拾圓也 同上 萩原嘉右衛門  
 金拾圓也 同上 上木久二郎  
 金四圓也 一之袋延命寺住職 鈴木 正三  
 金千圓也 法道寺 金拾五圓 齋藤見玉 金八  
 拾圓 石田會次郎 金九拾圓 村井彌曾八 金九  
 拾圓 渡邊留吉 金六拾圓 石田廣太郎 金四  
 拾圓 石田安五郎 石田德次郎 今關原太郎  
 金拾圓 八拾圓 推名常福寺檀家中  
 金拾圓 八拾圓 佐賀安樂寺檀家中  
 金五拾圓 淺草慶印寺 代表本橋利平 須  
 田喜代松 小川平右印門  
 金五拾圓 推名常福寺檀家中  
 金百圓 品川本榮寺檀家中  
 金四圓也 見付玄妙寺檀家  
 金壹圓也 同上 川島 權吉  
 金五拾圓也 同上 河合 せい  
 金拾圓也 品川本榮寺檀家 小網源太郎  
 金拾圓也 同上 中田寅一郎







## 日經上人の終焉史に就て……解決

金澤、本覺寺 内藤 日郎

身讀法華の偉動者たる常樂院日經上人の終焉に就ては、古來これを詳にせずといひ、或は富山神通川の邊りに、日經坂あり側に碑あるをもて多分此處ならんといつて、殆んど迷中に閉され居たり、

然るに予は一昨年就職已來、いかにかして、この疑問を霧さんものと、先づ一着に本覺寺門内第一種墓地十八坪内に、五輪塔の墓あり、四方の文字を閲するに、何分にも古きものとして難讀の點數々あり、時々度々に亘りて判讀に通せんものと、漸くにして左の文字だけを明め得たり

元和六年(月日不明)大僧都法印日經上人

表書に 南無妙法蓮華經

建造石塔也

裏書左方に 奉 施主三輪主水 敬白

依之先づ、三輪主水の歴語を調ふるの必要を認め、檀家總代本郷才一郎君に囑したるに、實に左の調書を

得たり、

三輪長好初ノ名ハ一長萬卷品作藏又ハ主水ト稱シ

志摩守ト云フ後妙公判物乙夜之書物品尾張ノ人父ヲ治郎

作ト曰フ母名ハ妙意瑞龍公ノ乳母也乃至微妙公封ヲ

襲グノ後大阪ノ亂起ル長好諸子及家臣ヲ帥イテ軍ニ

從ヒ戰功多長和佳兵私記大長好高德瑞龍微妙ノ三公ニ

歴仕シ増祿七千二百六十五石ヲ受ク元和初土橋乙夜之書物品與日記三輪家譜

由緒諸士系譜慶長元和ノ間奥村永福伊豫守横山長知山城守等

ト老臣ト爲ル後妙公判物元和五年老ヲ告ケ剃髮シテ法受

ト號ス本祿千石ヲ割キテ老ヲ養フ寛永四年八月没ス

昌興日記乙夜之書物品年七十有餘日舜ト法證ス寛永四年長

好天資直諫厚ク日蓮宗ヲ信ス其佩フル所ノ刀乃ニ經

文及宗祖日蓮ノ草名ヲ鐫ス出ル毎ニ必ス之レヲ佩ヒ

テ終身珍重スト云フ乙夜之書物品

更に、三輪主水所持の一部二卷法華經の奥書に 覺

得主三輪主水日舜

奥書開眼師大僧都法印日經花判

元和三年丁巳正月吉日 (本覺寺什法物の一なり)

(45)

三輪主水初め一致派にして、母妙意は同宗法光寺に歛めありしも、後ち日經上人の此の地に來化してより、歸依し遂に自邸三個の一を割ひて本覺寺を建つるに至る、一部二卷の妙經は帶刀と共に、身より離さず、元和五年剃髮して老後を専ら法華經に送りしは、上人入寂の前年にして、寛永四年の没は、上人入寂より後ること實に七年なり、

爾り而して、元和六年の上人入寂は、法受日舜の剃髮して、僅かに一年内のことなれば、自受法樂の信念も愈堅く、師の恩情も彌密なるの時、設ひ上人いづれの地に於て遊寂せらるゝとも、身親しく訪ひ弔らわざるの理あらんや、特に七千二百六十石の餘勢いまだ衰へず本祿千石を以て信神を養ひしもの、分限として、必ずや資祿を擧げ、用て厚き禮を盡くして恨事なからしめたるは付度するに餘りあり、況や現在巨資を投して、自の名を銘刻せる巍々たる五輪塔の存するものをや、

如此、專攻觀察より予は上人の眞骨眞體は、本覺寺に止めたるものとの斷定を與へ、眞體實墓は唯有一本

覺寺なりとの解決を施し、以て三百年來風雨に曝されし墓室をして、茲に謹み畏みて、修理を加へ、周圍に石柵を造築し、聊さか三百遠年記念序事を企圖して、永へに、身讀法華の偉靈に酬ひ上らんとの願を効かに發せり、此の事爲んぞ實現すべく愈々發表したるに、遠近有志の檀信非常の賛同を寄せ成績佳良に愈々作工事着手の程度に至れるをもて先づ實試的に發穿せしに果たせるかな地下一丈の底に直徑四寸高七寸の小瓶現出せり、收骨多量瓶中に滿てり、これぞ、上人の眞骨にあらずして何ぞや、冀くは宗學の徒、須く懷疑を去て、如實の信念に住せよ、敢て茲に微考を發表して本問題の解決に資す、



品製特店衣法田飯

帽雲青

各宗通用



付-バカ製ルネンヲ白

(尺曲)法寸	前小	一尺七寸四分
別大	同	一尺七寸四分
大	普通	一尺八寸三分
同	同	一尺八寸三分
同	同	一尺九寸二分

價正

金貳圓四拾錢  
 黒セル地上等  
 羅紗裏白輪子  
 金貳圓八拾錢  
 黒一本綾上等  
 羅紗裏同上  
 金參圓拾錢  
 黒羅子目上等  
 羅紗裏同上



一號	御袴の價格
二號	參
三號	四
四號	五
五號	六
七	圓圓圓圓圓

地ルセ  
 袴御



布教服

本セル地  
 別仕立ニテ

一號 金七圓也  
 二號 金八圓五拾錢  
 小包料各拾貳錢

甲斐絹肩裏付見本地御入用の  
 方は御申越次第早速送呈仕候

門傳衣法宗日

服教布 通各 帽雲青



南条五町屋具佛市都京

店衣法田飯

七四八六阪大座口替振







天晴會發行 ■ 大正三年度 ■

# 天晴會講演演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢  
本文約八百頁  
總クローヌ上製美本  
日蓮上人御尊像及  
講演會寫真入り  
送内 地拾貳錢  
料(朝鮮滿洲臺灣四拾錢)

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし  
直ちに一本を購みて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

▲思想上の羅針大教書なり 一刻も早く之を讀んで自己の思想生活の充實を期せよ

- 發賣所 三 秀 舍  
東京市神田區 美土代町二、一  
電話本局二〇七九番三三八四番  
接替口座二五七四七番
- 發賣所 三 上 徹  
東京市小石川區 白山前町十七  
接替口座東京二八八四〇番

## 日蓮主義の將來

大僧正 本多 日生

### 日蓮門下統合事業

#### 自己及社會の開顯

三上 義徹

#### 自信の權威

社 論

心 古定 不新

#### 日經上人三百遠年記念序事

内藤 日郎

#### 日記より

白山 迂人

# 統一

號二十四百二第

號 月 四

## 國産的宗教は何?

柴田 一能

大正三年度 四月十五日發行(毎月一、十五、三十日發行)